

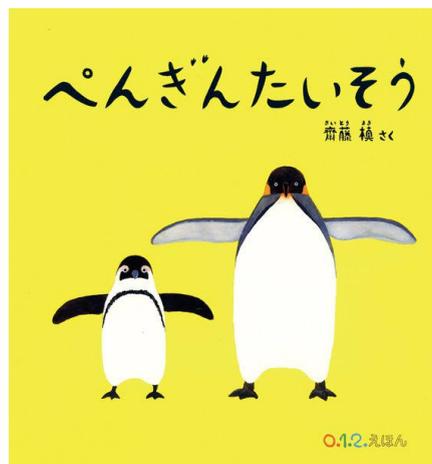
絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践  
～[絵本『ペンギンたいそう・にんじんだいこんごぼう』の世界を楽しむ]～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年  
梅崎百花・藤井茜

題材とした絵本

『ペンギンたいそう』

作:齋藤 模 出版:福音館書店



『にんじんだいこんごぼう』

作:植垣歩子(再話・絵) 出版:福音館書店

タイトル:『ペンギンたいそう』『にんじんだいこんごぼう』

実践準備の担当:梅崎・藤井

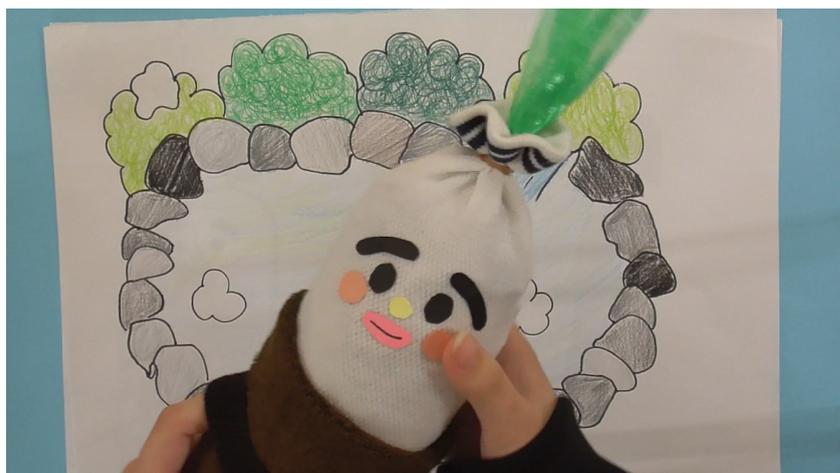
実践時の担当:ペンギン(梅崎・藤井)、  
ナレーション(梅崎・藤井)  
カメラ・音響(樋口先生)



1. 題材『ペンギンたいそう』『にんじんだいこんごぼう』選定の理由

『ペンギンたいそう』では絵本の中の活動を元に真似をして体を動かす活動を取り入れた。1ページずつ動きが違うので子どもたちと一緒に動かす楽しさや、絵本の中で出てくる動きの難しさなど子どもたちと一緒に出来たら良いと思い選んだ。

『にんじんだいこんごぼう』は、短大の授業の中で実際に先生が実践してこれ



は面白いと思い取り入れた。汚れてお風呂に入り汚れが取れたからなどどんな風にしたら子供たちに伝わるか考えて面白く、靴下を使用し演じる演出も面白いと思い決定した。

(執筆者：藤井)

## 2.絵本の世界から遊びへの展開

### 『ペンギン体操』

最初の導入に使えると思いました。体を動かす前にペンギン体操を入れたら子どもたちも楽しみながら動いてくれるのでは無いかと考えた。

その為には絵本をまず子どもたちに読む必要があるのかと思った。

ペンギンの親子でしているなので友達のペアを組んで一緒に体を動かすのも面白いと思った。

### 『にんじんだいこんごぼう』

食材を使うのでまずそれがどんな風に食べられるのかどんな料理が好きかなど食の意欲に繋がるのかを考えながら活動した。

遊びの展開は手が汚れたりする作業などににんじんだいこんごぼうみたいに泥が着いてたらなど話を広げて綺麗に洗うなどの展開を考えた。

(執筆者：藤井)

## 3.実践に際して大切にしたこと

体を動かす楽しさや周りを見てお友達と当たらないかなど感覚的などころでも感じて欲しいと思った。それには保育者の声掛けも必要だなと感じたし見せる側として大きく動作しないと子どもたちも小さく動いてしまうと思った。動きにも大きく動く、小さく動くなど動作をつけたらもっと子どもたちはもっと楽しさを感じられるのではないかと考えた。



(執筆者：藤井)

## 4.内容について

### (1) 全体の構成

『ペンギんたいそう』

- ①子どもたちに挨拶をし、声が聞こえているか画面は動いているかの確認をする。
- ②絵本と同じように子どもと一緒に体操をする。スクリーンには実際自分たちが動いている動きと、絵本を載せイメージしやすくする。動きはゆっくりから速く、小さくから大きくなど同じ動作でも違いができるようにする。何度か繰り返し行い、「上手だね」「はやいね」「もっともっと」など声掛けを行う。
- ③最後のページまで終わったら、次の話が楽しみになるような声掛けをする。



『にんじんだいこんごぼう』

- ①子どもたちに挨拶をし、声が聞こえているか画面は動いているかの確認をする。
- ②にんじんだいこんごぼうの野菜クイズをする。その時対話がより多くできるよう、どんな料理にしたら美味しいかなど質問しながら答えたり話したりする。
- ③話が一通りおわったら、「実は昔、、、」と絵本に繋がることを言う。画面を切替え、お話の世界へ入れるようにする。
- ④イラストを背景に『にんじんだいこんごぼう』の話を読み、靴下を使った手品のようなものをする。
- ⑤子どもたちに「これからも野菜を食べてね」といい、「次のお話が始まるまで待っていてね」と次のグループに繋げるような声掛けをする。

(執筆者：梅崎百花)

### (2) 子どもたちとの対話について

5分という短い時間の中で、どのように対話するか考えることは難しかった。幼教こども劇場の導入ということもあり、まずは元気に笑顔で大きな声でハキハキと話すことを意識した。『ペンギんたいそう』では私たちの動きを子どもが真似したり、子どもたちが自由に体を動かしたりと一緒にになって体操することができた。子どもたちの動きに対して、「もっともっと」など声をかけることで参加してもらおうとしたり、意欲の向上を試みた。また、床

に手をつける場面では「すごいね」などの声をかけることで達成感を得られるようにした。最後には、幼教こども劇場が楽しみになるような声掛けをし、待ってもらうことができた。『にんじんだいこんごぼう』は、子どもたちの言葉に沢山反応することを意識した。子どもたちとの対話の中では、子どもたちに伝わりやすいような言葉を使うことを心がけた。野菜クイズではすぐに正解が分かる子どもたちに対して「すごいね」などと声をかけることで嬉しさが増したらいいな、などと思った。野菜を使った料理を聞いた時、子どもが言った料理に対して「おいしいよね」と共感することで子どもたちとの距離感を縮めたいと思った。短い時間だったけれど、子どもの声を聞きながら進めることが出来た。

(執筆：梅崎百花)

### (3) 表現の工夫

2人で行う時、カメラの切り替えや音声を付けることは難しいのではないかと思い、なるべく固定カメラで収まるよう構成を考えた。先生方にカメラの切り替えや、絵本のページをめくってもらうなど沢山協力してもらいながらスムーズに進めることが出来た。『ペンギンたいそう』では、首元の見えやすい服装にしたり、ペンギンのお面をつけたりして子どもたちにより伝わりやすくすることを意識した。小さい動きから大きい動きまでバリエーションを増やしたことで飽きにくくした。『にんじんだいこんごぼう』では野菜クイズをする時に本物の野菜を使って、子どもたちの実体験に触れやすかったり、イメージしやすくしたりすることができた。物語を話すときに使ったイラストも見えやすいよう縁をペンで囲い色鉛筆を使って色を塗った。靴下を使う場面では靴下つぼさを無くするために中に新聞紙を詰めたり、かかとの部分を固定したり、顔をつけたりとイラストからのイメージと結びつきやすくすることを意識した。ナレーションははっきりゆっくりとわかりやすい言葉を使った。

(執筆：梅崎百花)



## (5) プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

1番という事もあり動きが少し小さかったりおどおどしていた場面があった。しかし、活動が始まれば子どもたちと一緒に楽しく活動出来たかなと思う。子どもたちは分からない事は分からないとはっきり伝えてくれるのでどんな感じで伝わるかしっかり考えておく事が大切だなと感じた。

画面の中でも受け答える場合は丸してなど指示をすれば子どもたちも丸を作ったりして状況把握がしやすかった。動きに大小を付けると子どもたちも一緒にしてくれるので、した方が面白い。にんじんだいこんごぼうでは言葉の伝え方で意味がわからなくなることがあるのでしっかり練習しておくことが大事だと感じた。

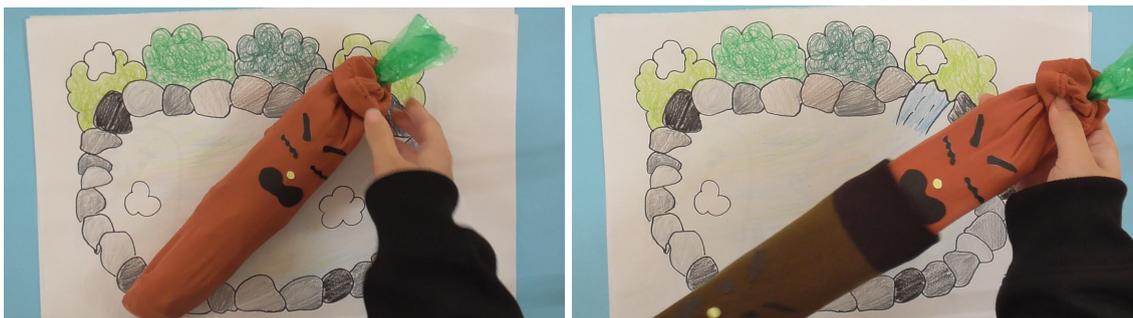
(執筆者：藤井茜)

## (6) 取り組む過程での改善と工夫

授業の最初の方では5分という短い時間で子どもたちとどのように対話表現をしたら良いのかがわからず、何をするのがなかなか決まらなかった。クイズにしようと思っても物語となかなか結びつかなかった。『にんじんだいこんごぼう』はお野菜クイズをすることで、野菜に興味を持ってもらったりこれまでどのようにして野菜を食べてきたかを思い出してもらったりすることができ、物語へと繋げやすくなった。最初は野菜は本物ではなく、イラストで行おうと思ったが、実物を使うことでよりイメージしやすくなったと思う。先生方からのアドバイスもあり、イラストから靴下へ対象が変わる時、結びつきやすいようイラストと同じ顔を靴下にも付けることにした。その時靴下をめくったとき顔が取れないようにきっちりくっつけるなど工夫をした。人参は普通の顔からのぼせた顔になっているなど細かいところにもこだわりを持って取り組んだ。

『ペンギんたいそう』ではプレ幼教こども劇場の時服装が揃っていなかったり、首の詰まった服を着ていたことで動きが分かりにくかったりしたため、本番の日は2人で黒のトレーナーに揃え統一し、動きも見えやすくなったように感じた。

2つに共通して、プレ幼教こども劇場では台本を読んでいて子どもたちと本当に対話できていたのか分からなかったが、本番ではセリフを覚え子どもの声もよく聞くことができた。



↑人参がのぼせている様子

(執筆者：梅崎百花)

## (7) 幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

『ペンギんたいそう』は、元気に笑顔で行うことで短い時間だったが子どもたちと一緒に体で沢山動かして楽しむことが出来た。特に腕をパタパタしたり、跳ぶ場面では子どもたちがとても楽しそうにしているこちらまで嬉しくなった。本来ペンギんたいそうは0、1、2歳くらいまでの子どもを対象とした絵本だと思う。しかし、年齢は関係なく私たちが恥ずかしがらず堂々とする事で年長のクラスの子どものも思い切り体を動かしていたように

感じた。画面越しの子どもたちは笑顔になっていて安心した。『にんじんだいこんごぼう』では、まずクイズをすることで子どもたちの興味を引きつけることができた。好きな料理は子どもによって違い、そこも面白いなと思った。子どもは発言をこちらが受け取るまで同じことを何回も必死に伝えていて、子どもの言葉に耳を傾け、応答することの大切さが改めてわかった。また、「ごぼう嫌い！」などの子どもらしい回答や、「大根のから揚げ」など私達も知らないような料理名など驚くような回答もあり、園や家庭で食材や料理について色々な体験をしているのかなと勉強になりました。子どもたちが言ったどのように料理して食べたら美味しいかに対して、「美味しいよね」と共感したことで嬉しそうな表情をしていたと思った。共感することは大切だと感じた。イラストと靴下を使い、ナレーションに合わせて動かす場面でももう少し対話が出来たら良かったのかなとも思った。

(執筆：梅崎百花)



## 5. 取り組みを通して学んだこと、得たこと

今回の幼教こども劇場でグループのメンバーとの協力の大切さや、子どもとの関わりの中で多くのことを学ぶことが出来た。5分という短い出番で子どもたちと対話をしながら絵本を元に表現をするということがとても難しいことなのだ気づくことができた。メンバーが2人と少なく自分がきちんとしなければという責任感も味わうことが出来た。画面を通じて子どもと関わった経験もあまりなく、どのように伝えたらいいのか、どのようなことをしたら子どもが楽しめるのか最初は全然思い浮かばず困った。ある程度案が決まってからは積極的に意見を出し、小道具作りや台本を考えることに励むことが出来た。プレ幼教こども劇場では想像以上に子どもたちの反応がよく、本番に向けて自信をつけることが出来た。幼教こども劇場の出だしということもあり、緊張したが大きな声ではきはきと笑顔でということ意識して、子どもと関わる事が出来た。私は人の前にでて笑顔ではきはき喋ったり動いたりすることは苦手だったけれど、今回の活動を通して自分にも出来るのだと自信をつけることが出来た。子どもと関わる上で、画面上であっても実際に会ったときでも、子どもの声、言葉をよく聞きそれに対して反応することはとても大切だと改めて感じた。また、私たち自身が楽しんで活動を行うことで子どもの興味関心を掻き立てたり、子どもたちが安心して楽しんで良いのだと思えるきっかけにも繋がると思った。

幼教こども劇場で学んだこと、感じたこと考えたことを大切にこれからに活かしていきたいと思う。楽しく終えられたことが何より良かったと思う。

(執筆:梅崎百花)



幼教こども劇場を通してグループで協力しながら分担して準備に取り組むことができたと思う。子どもたちが画面の向こうにいることを考えながらどんな風にしたら分かりやすく楽しく伝わるのか考えるのはとても大変だった。5分間と短い間に子どもたちとどう関わるか、関わる中にも楽しさ難しさなどを取り入れたいと思っていたので実践する難しさを体験した。

準備では『ペンギンたいそう』のお面を作ったり服装を揃えて黒にしたり、『にんじんだいこんごぼう』では靴下の色選びに苦戦し全然見つからず大変だった。靴下にも顔を付けたいとアイデアが出た為、作るもののなかなかくつつかずそこも苦戦した。

本番では出だしというプレッシャーもあったのですが子どもたちが出てきたら一緒に楽しく活動できたと思う。今回はリモートという環境の中でどんな風に伝わるか、子どもたちとどんな風に楽しむかなど課題がある中一つ一つ取り組めたと思う。

(執筆:藤井茜)